

西ドイツにおける「統合教育」

— ミュンヘン大学ヘルブルッゲ教授会見記

高橋 紘 士

社会保障研究所研究員

はじめに

筆者は研究所から海外出張の機会を与えられ昭和57年3月に約一か月間、主としてドイツを中心にヨーロッパの幾つかの都市を訪問し社会福祉施設や研究者を訪ねることができた。本稿で紹介するのはその中からミュンヘン市に於いて精力的に取り組まれている障害児と健常児との徹底した統合教育の試みの指導者であるミュンヘン大学の社会小児科学講座の教授であるヘルブルッゲ博士との会見記である。教授は肩書で明らかかなように小児科の医師であるがミュンヘン市の小児センター（KINDERZENTRUM MÜNCHEN）を中心に障害児を始めとする児童の療育をはじめ数多くの業績をあげている。とくに博士の児童の発達にかんする研究をわかりやすくまとめた「赤ちゃんの発達その生涯の最初の365日」は日本語への翻訳（福島正和訳 同朋社刊）をふくみ9か国に翻訳されている。その他専門の小児科医としての著作のいくつかは日本にも紹介されている。その小児科医としての活動の必然的な展開としてモンテソーリの方法を障害児の療育の領域に導入し、

而も障害児と健常児との徹底した統合教育の実験的な試みがある。その経緯、方法については博士の「モンテソーリ治療教育法」（1977年原著刊 西本・福島・三谷・春見訳 明治図書1979年刊）に詳しいが筆者はこのモンテソーリ・シュレーを2回にわたって訪問する機会を得、深い感銘を受けた。そしてこのモデル・シュレーの指導者である博士にお目にかかる機会を得て以下に紹介するようなインタビューをおこなうことができた。

問「はじめに、ヘルブルッゲ教授の専攻領域について、先生はミュンヘン大学医学部社会小児科学（SOZIAL PÄDIATRIE）講座の教授という地位におられますがこのSOZIALの意味を教えてください。」

教授「今日の問題は理論では分かっているけれども実践の場でどうしたらいいかわかっていない先生が多いことが問題である。SOZIALという言葉は家族のなかの状態、幼稚園、学校、社会との結びつきをどうするかということに意味がある。」

～ミュンヘン小児センターは博士を中心

海外の動き

にもうけられた児童の各方面にわたる療育のセンターである。クリニック、リハビリテーション、幼稚園、そしてこのモンテソーリ・シュールなど医学、教育、福祉など多様なアプローチがこのセンターの特色でありそれを支えているのが博士の強力なリーダーシップである。

問「モンテソーリ・シュールに於けるインテグレーション教育の基本的な理念はどういうものですか。」

教授「その質問に答えるには、何故モンテソーリ・シュールで健康な子供と障害をもった子供とを一緒に教育するのかという点に答えなければなりません。その根本にあるのは健康な子供の場合母親のもとで育ったか、施設で育ったか其の両方の発達の状態をみたときに社会性という点に著しい違いが出てくるという事実があることです。同じ健康な状態であっても、乳幼児というのは母親のもとで色々な援助を受けながら育つということで精神的にも安定するということです。そしてそれによって、社会性をその子供が獲得するということです。このような事実がモンテソーリ・シュールに於いての統合教育の考え方の基礎をなしているのです。即ち、健常児は障害児を援助する、而も健常児自身もその援助過程に於いて安定性を獲得することができるのです、また障害児も援助されることによって安定性を得ることができるのです。また障害児同士でもたとえば精薄児と肢体不自由児との間で助け合うことができるのです。この助けるという行動をつうじて安定というこ

とを学び又社会性を身につけて行けるのです。これが私共のモンテソーリ・シュールの考え方の基礎にある科学的な裏付けをもった理念なのです。」

問「私がモンテソーリ・シュールを見学させて戴いての強い印象は従来とかくインテグレーションという理念としてのみ語られがちですが此処では確立した方法であるという点です。それではこのようなモンテソーリ・シュール設立の背景はどんなものだったのですか、社会の取組や親のうけとめ方などについて教えていただけたら幸いです。」

教授「従来のモンテソーリ・シュールそのものは健常児を対象にした学校であります。障害児をふくんだ教育の試みは私がミュンヘンで初めておこなった試みなのです。而も、モデルの学校としてははじめたのであって未だ一般に普及してはいません。モンテソーリ・シュールとしては統合教育の試みを殖やしてゆきたいと考えていますが、従来の方法に基づく特殊教育の側からの反発も根強いのです。幸いモンテソーリの方法は国際的にひろがっていますから我々の統合教育の経験を世界中のモンテソーリ・シュールにひろげていきたいとかがえています。今述べましたようにモンテソーリ教育のそもそもの目標は健康な子供の方であったのです。最初は幼稚園からはじめて、小人数からゆっくり始めました、それからあるていどおおきくなってから障害児を受け入れるようになりました。たとえば、視覚障害の子供を受け入れた時には健常児に目隠しをさせてどういうふうに行けるかを

ためさせてみました，そうすると目の見えない子供のほうが数段上手に歩けるということを知り，子供達は目の見えない子供に敬意を感じるようになる，そしてそのことを家に帰って親に話すと親も感心して障害を持つ子供に関心をもち，その子を個人的に家に招待するようになる。そういった過程を経ることによって，障害を持っているということが暗いことではなく，ごく当たり前のこととして，障害児自身にもまわりの健常児自身にも親達にも受け入れられるようになっていく，そしてそれをおして障害児の親達にも健康な子供に接触できるようになって積極的な考えを身につけていくようになるのです。」

～モンテソーリについてここで簡単な紹介をしておこう，マリア・モンテソーリ（1870～1952）はイタリアの人である。彼女はエレン・ケイ，ジョン・デューイらと共に児童の自由や個性を尊重し，画一的な教育をせず個別学習を重くみる「新教育運動」とよばれる教育思潮の主唱者の一人である。彼女はイタリア人としては初めての女医であり大学卒業後障害者の保護施設に関係し精神発達や感情の面で障害のある子に接して子供達の教育に関心をもつようになり，ちょうどその頃精神薄弱児教育の父とよばれたセガンの研究をつうじ彼女の教育理論を発展させていった。彼女の教育の方法はモンテソーリ「子供の家」に於ける実践活動を通じてインド等のアジア・アフリカを含み世界的にひろがっていった。近年改めて「モンテソーリ・ルネッ

サンス」と言われるように彼女の方法の再評価がはじまったのは，このミュンヘンにおける障害児教育の成果にみられる新しいモンテソーリの方法の展開によるものである。我国においてもモンテソーリは教育学説として早くから知られているがその本格的な導入と日本の子供達への適用はこれからのようである。上智大学と深い関係にある「うめだあけぼの学園」が障害児の療育についてのモンテソーリの方法の日本における拠点である。（モンテソーリについてはヘルブルッゲ教授の前掲書および，井田範美編著『現場のためのモンテソーリ障害児教育 1982 あすなろ書房刊』参照のこと。またモンテソーリの著作はその多くが翻訳されている）

問「このモデル・シュレーの実践が健常児及び障害児に与えた色々な影響についておしえていただきたい」

教授「モンテソーリ・シュレーにいてる子供で知力の高い子供は4年の段階でギムナジウムに移ります，理想的なのはモンテソーリ・シュレーのなかにギムナジウムを作ってアビトゥア（大学入学のための資格試験）を受けることが出来るようにすることですが学校の経済状態を考えると難しいのです，普通の学校の欠点は先生の数が足りないので一人の先生が色々なクラスや教科を持たなければならない状態で而も自分の受持時間が終わるといなくなってしまいうため子供と先生の個人的な繋がりが無い状態なのです。このような一般の学校へモ

海外の動き

ンテソーリ・シューレから転学した子供では落ちこぼれの子供はいままで一人も出ていません、その理由はモンテソーリ・シューレに在学している間に独立して勉強をするという習慣を身に着けているので落ちこぼれないのです。それからギムナジウムへ行かない子供でも自分の意思をもって自分の進路を定めることが出来るだけの自立心を身に着けることが出来るのです。障害をもった子供達を見ると他の施設に居る子供と比べると数段、することが優れているということが確認できるのです。

学校を終わって社会に出た場合でも問題は他の学校の卒業生に比べ遙かに問題が少ないということがいえます。モンテソーリ・シューレで子供達が学んだことは何かといえば集中力、他の子供達への思いやり、自発性即ち先生に何かいわれたからやるのではなく自分の意志で行動する習慣、棒暗記で覚えたことではなく中身の理解にもとづいて覚えるということなのです。」

～このモンテソーリ・シューレの設立の経緯はかなり複雑なものようである、その経緯は教授の前掲書に詳しいが、特殊教育についての従来からの考え方とそれにもとづく教育制度の枠組を固守する官僚の壁はひじょうに厚かったようである（前掲書第二章 関係官庁、法律条項とわれわれのモンテソーリモデル参照）この統合教育の試みは結局従来の教育の枠にはおさまらないモデル・シューレとして発足することになった、そのため監督官庁の監視は極めて厳しいようで、モンテソーリ・シューレの校長先生の表現

をかりればモンテソーリ・シューレの実践は社会にたいする闘争であるというほど厳しい社会の目にさらされながらの試みである。

モンテソーリ・シューレはミュンヘン郊外のオリンピックの競技の時の設計・建築事務所の跡につくられたプレハブの校舎からなっているごく質素なたたずまいである。1983年には新しい敷地に移転が予定されている。日本でいう小学校から中学校にあたる学齢の児童を教育している。

モンテソーリ・シューレのクラスの構成はつぎのような三つのタイプからなる。Gクラス；重度の精神薄弱児のためのクラス7～8人で先生は二人つく。Lクラス；同じく重度の肢体不自由児のためのクラスで10～12人。モデル・クラス；20～25人で構成されその25%が何等かの障害をもった児童で障害の種類は様々。

モンテソーリ・シューレに於ける教育の基本理念は次のような項目に要約される。

- i 他人に迷惑をかけない。
- ii 自由な子供であること。
- iii 他人を傷つけない。
- iv うるさくしないこと。
- v 目的をもって行動すること。

先生は子供の成長の邪魔をしないこと。予め準備された空間のなかで目的をもって教育すること、その目的は人間の相互の交わりの発展をつうじて生きる喜び（FRIEDEN）を享受し、社会性を

培うことにある。

問「それでは親達にはどのような影響を及ぼしていますか」

教授「其の間への答えはまず、入学希望者の数が非常に多いということです。入学希望者を全部受け入れるためにはミュンヘンに5社のモンテソーリ・シューレを作らなければならなくなってしまいます。そのようなことは経済的に今の我々では不可能なことです。モンテソーリ・シューレは私立学校ですからどれだけ応募者が多いかが親達の反応の答えであるということになる訳です。」

問「他の特殊教育界への影響はどうか
教授「例えば、盲学校の先生達は関心を持って色々話題にはしているようです、然し私共の方法を受け入れることはいままでの習慣上簡単にはいかないのです。これはアメリカの盲学校での実践の例なのですが、子供達を視力の状態によって段階別にいくつかのグループに別けて盲学校で分離教育を受けた子供と通常の学校で統合教育を受けた子供とを比較してみますと、実際に本の文字をどの程度読むことができるかを調べてみますと、同じ視力の状態であってもあきらかに通常の学校で学んだ視覚障害児のほうが本の文字を読む能力は勝れているのです。このことが意味しているのは目のみえない子供達は盲学校でもっと目をみえなくさせているということなのです。この事実はあきらかに統合教育の量り知れないメリットを実証するものです、然し従来の教育の方法に固執しているとなかなか新し

い方法は受け入れられにくいものです。」

～私はこのモンテソーリ・シューレとならばもうひとつのモデル・シューレを見学することができた、それはフリーデル・エダー・シューレとって近年日本にも紹介されているルドルフ・シュタイナーの創始した人智学の思想にもとづいておこなわれている障害児教育の試みである。ここでは統合教育はおこなわれてはいないが、現在新校舎を建設中でその校舎は健常児のシュタイナー・シューレと隣接しているので交流の可能性がおおきくなるので相互の教育に良い結果がでてくるとおもわれるとのことだった。興味があったのは障害をもつことについての人智学の立場である。シュタイナーの思想では輪廻の考え方をその基調にしているが障害を持つというのはその輪廻の過程に於ける休息の時期だというのである。この思想にもとづいて独特の療育のシステムが構想され、実践されている。(新田義之他訳一人智学を基盤とする治癒教育の実践―心の手当てを必要とする人びとと共に生き、学び、働く―1980年 国土社刊を参照)

問「我国においても養護学校の義務化に伴う障害児教育の進展が逆に障害児の統合教育を寧ろ妨げてしまうという強い意見があります。」

教授「日本でも我々の方法の研究が筑波大学や上智大学の研究者に依ってすすめられ又実践もはじまっています。大事ななのはドイツに於けるモデル・シューレのように実

海外の動き

験を行い、その結果を公表し検討に供するという手続きによって統合教育の理念を実践に移して行くことではないでしょうか。障害の状態に対応した教育というのを固定的に考えると視覚障害には盲学校、聾啞児には聾啞のための特化した教育施設、肢体不自由には、精神薄弱には、学習障害児には、・・・と際限の無い細分化とそれに伴う分離教育の固定化といった事態を招きます、これは先に例をあげて説明したような統合教育の利点から障害児を益々遠ざけることになってしまいます。」

問「この日本での養護学校の義務化の社会福祉の面での一つの影響は特殊教育を受けた子供達が卒業後、授産施設等の社会福祉施設にきてみるとあらためて基礎的な生活訓練をやり直さなければならないようなことがよくあるようです。それが福祉のがわからの特殊教育への不満になっているようです。今回の私のモンテソーリ・シュール訪問の最大の成果は統合（インテグレーション）というのが理念であるばかりか、障害者処遇の方法であるということを確認できたことです。そして私の専攻領域にそくしていえば、この方法としてのインテグレーションをどのようにしてプランニングの目的概念に置きなおすかという点にあります。では次の質問をさせていただきます、日本での大きな問題は障害児が学齢期を終了してからの所謂、卒業後の進路対策というのが話題になっています、そこで問題になるのは親と障害児との関係及び障害児と社会との関係です。この点についてどんなお考えをお持ちですか。」

教授「私の立場は健康な子供と障害をもった子供とを一緒に生活させるということを目的としています、そのために必要な条件は幼稚園に入る迄にその両親を教育することが重要だと考えています。まず障害をもった子供を家庭のなかで普通に受け入れさせることそして兄弟との繋がりを確保することが重要だと考えています。そして親が健康なこどもたちと自分の子供が交わることを積極的に考えるよう仕向けていくことが大事だとかんがえています。勿論私としては学校を卒業後障害児達が一般の会社で働くことができるような可能性を求めています、しかしドイツの場合でも多くの場合施設に閉じ籠ってしまうことになるのです。私の見るところ日本に於ける家庭のあり方は高く評価できるようにおもわれます。障害児のための教育の効果の一つは家庭の機能を強化させることにあるということも指摘しておきたいとおもいます。」

問「在宅の障害児の重要問題の一つは所謂親亡き後の問題ですがこの問題についてどうお考えですか。」

教授「だからこそ親ばかりでなく広い範囲の親族を含んだ教育が大事なのです。」

問「モンテソーリ・シュールを見学しての強い印象は先生方の献身的な仕事ぶりとその資質の高さです、この理由はどんなところにあるのでしょうか。」

教授「教員養成段階での成績からだけみればモンテソーリ・シュールの先生の点は公立の学校の先生とくらべ高いとはいえないかもしれませんが、然しモンテソーリ教育法の訓練をつうじて新しい可能をもちだして

くるといえます。モンテソーリ・シュレーの教師としての一番重要な資質は子供を愛することと、何かをなし遂げたいという意志をもつことのふたつです。」

～ここで私が今回の訪問でお世話になったモンテソーリ・シュレーの教師をしている、H. D. シュテッカーさんのことを紹介しておこう。氏は私と略同じ世代で30代の半ばの年齢。氏はシュタイナーの学校を終了後アビトゥアをとり、鉄道関係の仕事につきそのポジションは大変な高給であった由、しかしビジネスの仕事が性にあわなかったようである。氏は徴兵をうけたとき信条的な理由からそれを拒否し、徴兵期間中福祉施設で働くことにした。この許可を得るためには相当厳格な審査があるようである(WEHR DIENST), 結局この経験が今の仕事に導くことになったようである。その後勉強をしておし体育の教師の資格をとるとともに障害児の教育にも関心を持ち専門的な勉強をしたようである。氏の専門は PSYCHO MOTOR EDUCATION 日本語でどのような定訳があるのかわからないが、障害をもった子供達の心身の発達を体を動かすことをつうじて促すための方法の体系で近年非常に発展している領域だそうである。勿論モンテソーリ・シュレーの教師の資格をもっており、氏の仕事はモンテソーリの教育法とこの PSYCHO MOTOR EDUCATION を統合しながら障害児の体育教育をおこなうことにある。氏のモンテソーリ・シュレーでの体育の援業の強い印

象の一つは綿密な教具等の準備とその上での子供たちの自発性の尊重である。日本の在宅の障害児の大きい問題は肥満と行動の鈍さであるということをよく聞くが、このクラスの障害児たちの敏捷さはかなり重度の子供達であるという点を考えにいとると驚くべきものであった。この方法の効果を教えてくれるものであった。また子供達の助けあいが極めて自然な形で行われているのにも感心させられた。氏はべつにミュンヘン市内のスイミング・センターで水泳のコーチをしており、そこでも障害児のためのクラスをもっておりそこも見学させてもらったが、子供達の自発性を見事に引き出しながら練習をさせていた。丁度肢体不自由の子が初めてクラスに参加していたがその子から水への恐れを巧みに取り除きながらプールに入れていく手際は見事なものであった。先にあげたモンテソーリの教育理念の見事な実践に接することができた思いであった。因に氏の大学では体育と並行してギリシャの彫刻史を学んだ由であるが、これと体育教師としての仕事とは内在的に深く結びついているということだった。

あ と が き

ヘルブルッゲ教授はオンケル・ドクターというあだなのとおりきさくなそしてエネルギーギッシュな方である。必ずしも障害児の問題について専門でもない筆者に長い時間をとってインタビューに応じてくださり素人の質問に懇切丁寧に答えて下さったのも博士のきどらぬ人柄と、博士の実践の経験

海外の動き

をあまねく伝えたいという情熱のしからしむるためだとおもわれ深い感謝の念を博士に捧げたいと思う。博士の研究室にはメキシコで求められたという聖母マリアの像がありまた天使の絵が掲げられ、博士の情熱の源としての信仰の篤さをうかがわせるものであった。

障害児の教育問題に必ずしも専門でない筆者がまた特殊教育の問題を対象としない本誌にこのような記事を掲載することにしたのは理由がある。筆者自身昨年の国際障害者年をきっかけに障害者の調査や審議会の答申、自治体レベルでの計画策定にかかわりながらあらためて医療、社会福祉、教育、雇用労働等異分野間の協力の必要性を感じたこと。特に教育と社会福祉の連係は言うは易く行うは難いということを実感した。このミュンヘンでの実験はその壁を突破するための得難い実例であり、その根底にある理念および確固たる方法としてのインテグレーションの意味をひろく紹介したいと思ったからである。筆者はミュンヘンで Pfennig Paradeis という身体障害者の施設を見学することができた。そこは身体障害者のための学校（義務教育段階からアビトゥア取得段階まで）住宅、身体障害者のための作業所（コンピュータ、歯科技工、彫金、陶芸など十分市場価値のある技術により自立が可能な給与が得られる。）等

がミュンヘンの中心から二十分ぐらいの便利な住宅地にある総合施設である。日本の観念でいうならば、労働省、文部省、建設省、厚生省に跨がる施設であり、それが一般の醸金と有名な大企業であるポッシュ社の援助で運営されている純民間施設である。これも福祉のありかたに示唆をあたえるものであるが、たてわりを排し異分野間の統合のもうひとつの例である。

ミュンヘン市の交通網はヨーロッパの都市のなかでも最も整備が行き届いているものとして定評があるが、筆者の約一週間の滞在中地下鉄で車椅子の乗客と乗りあわせること4～5回に及んだ。地下鉄の総ての駅に車椅子でアクセス可能なエレベーターが設置され、ホームと車両の段差、ドアの幅等総てにわたって配慮がなされている電車、バスも同様である。そのためには大変な額の投資がおこなわれた由。方法としてのインテグレーションの考え方の普及をものがたるものであろう。

なお本稿ではドイツの特殊教育の全体像に触れることができなかったこの事情については西ドイツ教育審議会著『西ドイツの障害児教育』井谷訳 明治図書刊が詳しいので紹介しておきたい。また本インタビューにあたってミュンヘン在住の永井慧俐子氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。